

Title	森岡敬三「四海結盟簿」と森鼻宗次書簡：初期大阪医学校のひとびと
Author(s)	松田, 武
Citation	大阪大学史紀要. 1983, 3, p. 129-135
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5151
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【資料紹介】

森岡敬三「四海結盟簿」と森鼻宗次書簡

——初期大阪医学校のひとびと——

松田 武

(一)

明治二年二月大阪府仮病院がボードインを教師に迎え、緒方惟準が医学伝習および仮病院の設立・運営の責任者として発足した。診療と教育の初期のスタッフは適塾で学んだ人びとが主力であった。医学伝習を開始するとの報はひろく各地に伝えられたものとみえ、「嗜鳴嘍嘆氏聘ニ応シ大坂ニ来リ病坊ニ入り方ヲ為ス。未タ数月ナラス、治ヲ乞フ者日ニ門ニ満チ生徒遠ヨリ来リ、業ヲ受クル者百余人ニ及フ」（『嗜鳴嘍嘆 袖珍方叢』小序）と緒方惟準が述べているように多数の医学伝習生が参集した。

緒方銚次郎氏はかつて「浪華仮病院及初代大阪医学校を語る」のなかで、仮病院時代（明治二年二月～七月）の伝習生および大阪（府）医学校時代（明治二年十一月～三年十二月）の生徒の人名について、「医学校 職務進退留」（旧三高同窓会所蔵）から調査をされている。「職務進退留」は明治二年十一月大阪府医学校発足のときからの記録であるため、仮病院時代に遡行して在籍伝習生名を尋ねることは容易でない。緒方氏はもう一つの資料、大福寺における集合記念写真（『大阪大学史紀要』第二号、三七頁、写真参照）から「目下余は此推定人物を目標として知人及び其遺族と思われる方々に洽ねく記念写真の複写と紹介状を発送して其返信を求めるの方法を取って見る計画を講じて居る」と

のべられている。その結果については残念ながら知る機会をええない。

(二)

ところでここで紹介する「四海結盟簿」は明治二、三年頃、森岡敬三が医学伝習生として親しく接した人々の交遊録とでもいうもので、四十八名の友人たちの署名がある。緒方氏の調査の欠を若干でも補うことになろう。

森岡敬三史料との出合いについて省述すると、若山光円氏（大垣市久瀬川町六）が曾叔父に当る森岡敬三の足跡についてかねてより調査されており、順天堂大の酒井ンヅ氏を通じて当方に問い合せがあり、交通がはじまり前記史料をみる機会がつけられたのである。大垣を訪ずれたのは昨年（一九八二）十月十五日のことである。

森岡敬三は近江国阪田郡醒井村の出身。「医学校 職務進退留」の明治三庚午年十二月二十六日の条に、原書生高峰謙吉、奥村郁太郎、森岡敬三ら十九名、翻譯生十名にたいし翌日辰刻医学校に出頭するよう通達が出されている。そして翌日、「精勤進学ニ付、為御褒賞御書籍一部下賜候事」として原書生に「エブストル コモン スクール」巻部を与えられている。これが森岡敬三の初見である。ついで明治十三年四月二十五日発行の『刀圭雜誌』第四九号に堺県医学校教員として森鼻宗次（校長）、新宮涼斎（四等教授）、森岡敬三（五等同）、松田孟（六等同）らが名を列らねている。ついで明治十三年エルメレンス記念碑出金名簿（刀圭雜誌）に堺県医学校同僚らとともに献金に名を列ねている。最近宗田一氏が堺医学校に関する研究で紹介されている。^(注)

「明治七 五月十七日始

堺医学校并野郎医学所 諸記留」

と表記した冊子（北河内交野郡の開業医藤野長嶺の備忘録、杏雨書屋蔵書）に、明治七年の講義分担として、

「アッキン氏

内科書

月曜第十二時ヨリ午後二時迄

森鼻宗次講義

独徠氏外科新説

同三迄

森岡敬三講義

理礼氏薬物学

火曜日本曜日土曜午後第二時ヨリ三時迄

千原卓三郎講義

とあり、堺県医学学校創設時に校長森鼻宗次と行を共にし、教員として森鼻が訳した刊本を教科書に使用していたことが判明する。千原卓三郎も「四海結盟簿」に記帳している。森岡はのち和歌山病院に出仕し、同院生徒教授を兼任している。恐らく明治十三年堺県医学学校廃止後のことであろう。

(注) 宗田一「明治初期の英米型医学採用地方公立医学学校の实例」(『医学史研究』五七号)

(三)

「四海結盟簿」に記帳した人びとはすべてが医学学校の同窓と考えてよいかどうかはわからない。署名年次も明治元年から三年とやや時間幅があり、在学中折にふれ記帳したものと思われる。

内容は詩文が多数を占め、当時の書生の日常や教養のあり方が窺えて興味深い。また、(12)今浪花梶木町 日野主税塾生 (20)在三崎塾 (30)浪華今橋之西 三崎先生塾 と記す部分があるが、(12)は緒方洪庵と大阪除痘館を設立した日野葛民の養子で除痘館社中に名を列ねる。(20)(30)は恐らく福井出身の三崎囁輔と思われる。三崎は長崎以来ハタタの通弁として行動を共にし、「舎密局開講ノ説」の訳述者として知られ、明治三年理学校において大助教に任ぜられている。両

者とも塾を開き子弟の教育にあたったことは興味あることである。

なお「四海結盟簿」から本誌に載録したのは前半部分で、後半はメモランダムと住所録にあてられているので省略した。また同簿を綴じ込み製本する際、天地がカットされており解読不能の部分があるのはその為である。

(四)

森岡敬三が私淑した森鼻宗次は公私を問わずよき相談相手でもあったようである。紹介する森鼻宗次の書簡は「伊勢国安濃郡津大門町観音寺境内 三重県医学校内、森岡敬三宛」となっているが、森岡敬三の岳父が医学学校病院に入院中であった折のもの(若山光門氏談)。年次はないが、「肥後之暴動」とあるから明治九年十月の神風連の乱のことであろう。

この手紙は堺県医学学校校長時代のものであるが、訳業へのあふるるばかりの情熱が行間から窮うことができ、森鼻宗次の個性ある一面を知る上で貴重な書簡であると思う。森鼻宗次の略歴を附記しておく。

嘉永元年(一八四八)摂津国有馬郡藍本村に生れる。森鼻家は代々摂津国三田藩の藩医の家柄である。父純三郎は緒方洪庵の適塾門人帳第十番目に記帳した人である。宗次は長じて大坂にでて緒方郁藏の独笑軒塾に入り蘭医学を学び、ついで江戸開成所教授であった川本幸民が郷里三田に帰ったことを知り、その塾に入って蘭学・英学を修めた。明治三年八月再び大坂にでて、大坂医学病院に奉職、授読生試補となる。ついで十一月少授読生、四年二月授読生、九月副当直兼務、十一月文部十三等出仕・薬局長副と累進したが、明治五年九月第四大学区医学学校(明治五年八月大阪医学学校を改称)の廃校によって、明治六年二月大阪府へ転任し、新設の大阪府病院の病院掛となる。

語学の才にめぐまれた宗次は英米医書の反訳抄訳を精力的に世にだし、明治開化期の医学知識の導入に大きく貢献した。明治五年から六年にかけて訳書出版願によると、『薬劑新書』『華氏日用新方』『日用薬劑分量考』『薬物新

論』『葛絡氏外科新論』『内科新選』『皮下注射要略』『新薬摘要』『独徠氏外科新説』である。

明治七年五月堺県は仮医学校を妙国寺境内に設置、聘せられて校長となり、翌年校舎を材木町東三丁目に新築し、ここに病院を併設し、校長兼病院長に就任した。十四年堺県の大阪府への併合以前の十三年十月堺県医学校は廃止されたため、ふたたび大阪府御用掛衛生課詰兼大阪府立病院出仕となる。病院では可療医および二等教諭として診療と教育に従事し、さらに駆籠院が大阪府病院

【四海結盟簿】

越藩 (1)

新宮貞孝
字信一号松
溪又拾翠菴
堂稱起鏡通
稱涼園家在
於禁垣之西
南
満堂置酒沸春
声楼杏花間
飛玉舢人坐彩
霞紅世界不知
官路有枯柴
右録旧作花下飲
之詩示

森岡君一祭 孝
参羽鷺塚 近藤 薫
良興
號碧落
黄神橋下敷
天潜一尾漂
流到横湾
〇〇〇〇化
鯤〇菜天下
山海跨美山
右
戊辰孟冬
三樹之留別

丹後田辺藩 (3)
潤東精一請
克紹字君烈
号実証又月江
〇〇于時明治二年
春於告成堂序
知矣
尔来君遠遊北海必乞
玉到駕而話疇昔之遊矣
遊永代浦
高撞出扁舟海上浮蒼波
萬頃望悠々清風徐起
月東上境得当年赤壁
遊
述懷
日々宵々凭几坐洋書帙
読理難明当曠階外秋
風颯懷乃光陰不可輕

信陽松府之藩 (4)
澤辺雄司
名正晃字
子哲號志城
又志誠又號
松塙山人
梅梢紅已衰
柳葉綠初鮮
敲句書窓下
一瓢独自憐
呈
為敬君惠詩
湖東宮官
塩谷退藏
名捲字退
藏号雲処
予与森岡同国而讒隔

の附属となるとその院長に推され、また警察病院長を兼任した。十六年府知事の内命により奈良分病院長を命ぜられたとき、彼は「公事は公然と命ぜられるべきだ」と主張して、決然職を辞した。

のち大阪東区高麗橋五丁目で全科開業し、一時大阪市医師会長をつとめたが、人と相いれない性格がわざわいし不遇の晩年を送ったという。大正七年七十一歳で没す。(中野操『大阪医学風土記』、『大阪大学医学伝習百年史年表』、『三高同窓会所蔵の「医学校職務進退留」「第一番中学諸官省往復簿」

数里耳乃不乞姓名奄

然共客京華且結兄

弟之盟故姑書姓名

云之

月出烟雲起花開

風雨來世事如斯

耳□山笑把杯

春雨偶感錄以示

森岡大兄一笑

播州竜野藩

松尾文奎

名明字居

然号近取

别号二費

道人

嬋妍□雪發

当比読書窓

一朵故人意

君看春渡江

偶有折梅寄

故人之詩錄

以汚 尊眼

明治二春閏二月

肥州藩

(7)

(6)

佐々木春潮

鯖江藩

加藤豊造

紀藩

山下主一

名博草字

三成号清

風又柳翠軒

但州村岡藩

菅冬□□

丹波亀山藩

萩野驥一

松平越前守藩

服部新

今浪花梶木町

日野主税塾生

播磨福本藩

横田玄碩

丹陽園部藩

(14)

(13)

(12)

(11)

(10)

(9)

(8)

足助良吉

志州鳥羽藩

中之郷

相良珉盛

尾藩

伊藤鎌三郎

南越府中世臣

前田松閣

利匡

号竹浦

阿波国高田郡

吉田驛艸医

佐々木文驥

実名为嗣

号雪江

越前大牧

野田專哉

播磨福本藩

西川為三

名琢字子

(20)

(19)

(18)

(17)

(16)

(15)

慮時在三崎

塾余患無知氣

此數年至今

有君幸結斷金

之交嗚呼情之

厚甚矣

南越福城

大久保主計

高則

通称実吉

丹州田辺草医

吉田研造

越州福井之藩士

岩佐 巖

名篤字

行敬号雪蓋

又号挑李江

上涼風徐來

取家在于福

城之北

丹陽園部

小出伊勢守侍醫

(24)

(23)

(22)

(21)

村瀬昌益

維廉

號篤翁

字清甫

雲州寒郷之痴生

原大佐

名中字精一号

漸々斎又錦浦

海天寒月浴水姿櫛比

樓台映水奇賈船

豪奴只絃唱無人賞

景着新□□

右神戸灘夜坐録以

呈応需

于時明治二己巳首夏

於浪花瓶城塾謹誌

作州吉野郡

馬形邑

豊福春造

六月十日帰省前ナ

セント誌之

越前福井

國莖誼人

(27)

(26)

(25)

南越藩

山本淳輔

越前福井藩士

辻岡精介

実名精字

子後号栗

軒

菊地晚節

奥州盛岡之産今遊

浪華今橋之西三崎

先生塾

雲州

宮崎松蔵

但州小畑

小林与太良

源則胤

字子卿

号竹圃

九月朔舟発兵庫

晚入浪花

征山横處如長蛇

雨後水天雲亦遮

(28)

(29)

(30)

(31)

(32)

南望高城舟似霧
秋風落日入浪花

鳳駕若有

過陋邦必待

叩柴扉耳

借踰忘固陋誤以

拙作穢於 森岡

君之英名箋

誑蟹行字書懷

驕驕已衰倒歎在

亦傾倒行矣莫遲々

前郊多勞草

雲州神戸荻原之郷

西山関一郎

名常字子格

號荻郷又號

李納

西京大宮街寒土

奥邸郁太郎

名郁字士文号

杏而主人別

号葛莖人

(35)

(34)

(33)

丹陽篠山藩

石崎貞造

名道廻

字子家

号瀧東

明治三庚午夏日

坂府医学寮南

窓下誌

讚岐高松藩

井上直衛

名 正勝

号 南洲

家在緩松山之下

駿不士山西亀井城東

多々良榎菴

名正次

号榎庵

明治二己午冬^{ついで}阪府

医学校同窓之時

森岡兄之玉簿ヲ

汚ス

西京

新宮機一郎

(39)

(38)

(37)

(36)

Om our hand

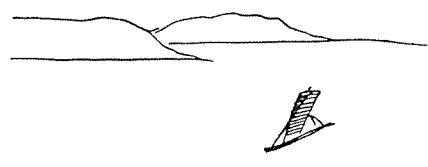
山陰道之中心
松村ナララ
北尾次郎

(41)

北陸道
金澤
高峯讓吉
名讓
字士謙
号 樸窓

(40)

名義脩
字士齋
号 涼州
又 梅梢
堂主人



*At the Phantasmia von dem
Shreding*

井原村々医
千原卓三郎

(45)

備中小田縣
後月郡
宮武良策

(44)

南海道丸龜藩
餓居士
別安榮飢

中備庭瀨藩住家不定処
竹井恒三

(43)

被地江広島ヨリ半里アリ
向井速治

藥州藝安郡
仁保島淵崎浦
大橋杏伯宅ニ而

(42)

煙雨江上歌
煙雨江上一葉船江上烟
深船不前為報江東荻
芦洲烟江上鳴奈焉

龍
方號跡
朝意字士
林漸

(48)

福岡県筑前国
宗像郡奴山村八
百五番地

大西亀次郎
十番地
加古郡高畑村
兵庫縣播磨国

(47)

愛媛縣下伊与国
和氣郡三津濱新
町 救患舎 (住吉町)
松田 孟

(46)

【森岡敬三宛森鼻宗次書簡】

花草拜見致如貴論日々寒冷相増候

処無御御勤働仕候条奉係賀、然処

尊父頃日御不快之由一向不承事ニ候

御報文ニ由レハ心臓病之様子定テ御

掛慮之段察入候、劣生之意見ト申テ

別ニ無之候ニ付貴県病院之諸先生ト

御相談之上及御治療候段所禱候也

履歴書云々ニ付御問合ニ預リ是モ

其景況劣生之耳目ニ到ラス乍併弊県

病院ノ役員ハ本年六月改テ履歴書ニ

通差出シ候、是ハ全ク今春内務省ヨ

リ病院或ハ医学校共私設立并ニ教員

雇入之規則御発行ニ就テノ事ト察居

候、未タ本省ヨリ試験様ノ事ハ聞及

ハサルナリ、当九年二月以来教員雇

入ニ就テハ必ス七科卒業ノ者ニ非サ

レハ採用ス可ラス

右卒業ニ及ハサル者ハ助手タルヲ

得ヘク主任タルヲ得ス云々ハ曾テ劣

生ノ聞ク所ナリ自然此等之事件ニ無

之哉、尚劣生等ノ方向ニ関係アル事

件ナレハ詳細探索致シ得ル所アレハ

報知可申上候矣、君等ハ固ヨリ試験

法相行レ候ハ、却テ好都合ト察候、

其故ハ当今官途ニ占位セル医生ハ悉

皆博識多芸ト難申哉ト聞及候得ハナ

リ、因テ考レハ是又医生ヲ鼓舞スル

良法ナラン併シ劣生ハ甚迷惑千万ニ

有之候

千原君ヨリ一昨日一書到着、同君

モ当今ハ余程快方之由申来候

外科新説ハ三十巻迄草稿略落成ニ

及候随テ上木致度候得共、年来之繁

用ニ由テ遷延致シ候、尚又同書ハ訳

文之劣拙ナルカ医生ノ道ニ適セサル

カ余リ部数発出セス、此上十余巻ヲ

彫刻スルトハトテモ非力ニ及ハサル

ニ就何程志アルト雖トモ○或ハ□

印無之テハ不遂之甚残懐之至ニ有之

候、因テ逐次其初ヨリ彫刻致度存意

ニ候也

アッキン氏内科書ハ劣生モ過日一

部入用ニ付東京丸善ハ申遣候得共、

彼地ニ品切レノ由ニテ断リ来候、尚

又過日呈一書其余白ニ組織学書云々

并ニ病理学書云々申上置候、カルペ

ントル生理書ハ七十年以後者未タ聞

及ハス多分無之ト察候、同氏ヒュー

マン、ヒシヨロジト題シテ龍動版

二冊物出来ノ様子年代ハ千八百六十

九年ナリ、併シ東京へ舶来有之候哉

否ヤ不相分候得共、一応御尋可然ト

奉存候、併シアメリカ版ニテ五十五

年ノ者ハ昨年来東京并ニ大阪ニ有ト

之ト混雜セサルヲ要ス、ダルトン生

理書千八百七十五年ニ改版ニ相成過

日大阪へ十部斗来リ候ニ付堺地へ悉

皆引付候、是ハ殆ント旧版ニ倍シ頗

ル完備ノ好本ト相見候、又ダルトン

氏生理書ノ旧版ト同様ノ「コンテン

ツ」ニテ千八百七十三年鑿行カーク

ス氏生理書アリ

是ハ劣生過月本國ヨリ取寄セ相試

候処、頗ル適好有用ニ有之候、併東

京ニ有無之程ハ難相分候得共、是又

一応御問合可然ト奉存候

過日来肥後國之暴動ニ付大阪鎮台

モ多分ニ出兵有之候、併シ十月三十

一日迄ノ東京報知新聞ヲ閱スレハ大

低平穩之様子ナリ、当堺地ハ此事ニ

就キ毫モ動揺スルコトナシ、今日ハ

天長節ニ付唯今ヨリ上庁可致奔筆一

書相認甚錯雜之至御海客可被成候也、

余ハ期後信候、頓首

十一月三日

森岡学兄

玉案下

宗次拜

追白時々御転宅之由住所ノ不定ハ甚煩勞察入候、劣生モ近ミ小林寺町へ転居ノ積リ未タ日限ハ定ラサレトモ転後ハ必ス報知可申上候

この他、森鼻宗次の贈物札状や森岡敬三の実家宛書簡など数通保存されているが、ここでは割愛した。末尾ながら資料を提供いただいた若山光円氏のご好意に感謝します。

また資料解説にご協力いただいた大西愛氏、梅溪昇教授、脇田修助教授に謝意を表します。

(まつた たけし
五十年史資料・編集室)